儀は一先づ了り、參列の諸員は順次に退散した。後に御神樂が奉仕され、夜半過ぐる頃にも及ぶのは、あらためていふまでもない。

きのふの御儀すべてが、我が特有の傳說の上に基を置いた神祕と崇高と典雅との結晶であり、國體の象徵であり、民族的の美術でもある。廣く知識を世界に求め、宇內の大勢に立ち後れず、進んでこれに導かうとする以上、世態文明の變遷發展はもとより當然のことである。たゞその底を流るゝ民族的精神の基調には、どこまでも我特有の傳說歷史を離れざるものが存在しなければならぬ。御代知ろし召す初めに當たつて、この儀を擧げさせられる思召しの程も計られて、畏くも有難く覺える。文武百官を初め、國政に參與するを許されて、我等の推した選良の士も、洩れなくこのゆかしき盛儀に陪し、親く大詔を蒙つたのである。それ〴〵の職分に應じ、全力を盡くして叡慮に添ひ奉るべきを、今更に自から誓つたのであらう。幸ひにしてこの儀に列ることを得た光榮を欣ぶと共に、盛儀を行はせられた聖旨を慮れば、感泣を禁じ得ない。

（大阪毎日新聞附錄、昭和三年十一月十三日）